

哲学文化塾機関誌 もっと源流へ、もっと本質へ!

# フィロカルチャー La Philoculture

## 秋冬

autumn & winter

2017

### 世界遺産の文化構造学 グローカリゼーションのトポロジィ

Litterae Humaniores

### 人文学の力学

古代ギリシヤ・ローマ「古典」〜幻想と力の共鳴〜

河島思朗

岡橋純子

美は輝きだ

哲学するプログラム言語

この秋は朗読劇で! お芝居レトロ銅版『ペリクリーズ』

シェイクスピアは隠れカトリックだった?

フィロカルチャーなイベント・レポート

IMAMICHI MEMORIAL

「わが哲学を語る」を語り継ぐために



# フィロカルチャー La Philoculture

秋冬

autumn & winter

2017

## 3 世界遺産の文化構造学

グローカリゼーションのトポロジー

岡橋純子



## 11 Litterae Humaniores の力学

古代ギリシャ・ローマ「古典」～幻想と力の共鳴～

河島思朗



## 18 美は輝きだ hamacken

## 20 哲学するプログラム言語 “Who should be I?” モカ

## 22 この秋は朗読劇で! シェイクスピア『ペリクリース』お芝居レトロ鍋

## 24 シェイクスピアは隠れカトリックだった? 松田義幸

## 26 フィロカルチャーなイベント・レポート

## 28 「わが哲学を語る」を語り継ぐために

## 31 プレゼント&インフォメーション



## Litterae Humaniores<sup>1)</sup> (人文学) という言葉

リッテラ (複数形 litterae) が正式の綴りで、litera は刻文などに現れる異形です。意味・ニュアンスに違いはないと思います。humanus は「人間に関する、人間的な、人間にふさわしい、教養ある、親切な……」ですので、その比較級 humanior は「より人間的な」となります。「より人間的な文学 (文字で書かれたものの研究)」、つまり神学などに対して人間学、人文学を表します。古代・中世には文系理系の区別がありませんので、humaniores (複数形) が神学に対する人間に関わる学の呼称になったのは、中世あるいはルネサンス期、自然科学に対する人文科学の呼称になったのは、近代かもしれません。古代では、キケローが humanitas (英. humanity) という抽象名詞で人間の学、人文学を表現しました。弁論家として国家に尽くすため、また善き人間として生きるための教養を意味し、ギリシア語の παιδεία に相当します。序でに、humanus, homo (人間) の語源は humus (土, 大地)<sup>2)</sup> だという説があります (辞書では? 印付きですが)。神話で、人類が土から生まれたことをいうのか、土に帰る存在だからか、むしろ天に比べると地を這う低い存在、を表している、と解すべきかと思います。(中務哲郎・談)

編集注 1) litterae humaniores は中世に造られたラテン語で、中世の発音は「リテリー・ヒューメニオーリーズ」のようになる。2) homo, humus とともに印欧祖語 \*ǵʰm̥m̥ó (地球人, 人間) < \*dʰéǵʰóm (地球, 大地) に由来するといわれている。

# 世界遺産が分かる!

この夏、「『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」が世界遺産に登録された。これを機に世界遺産について改めて情報を整理し、学んでみたい。理念、制度、運用、そして私たちはどのように向き合い、文化財を生かすことができるのか。国連職員としてユネスコ・パリ本部で約9年間にわたり、世界遺産のマネジメント業務に携わった経験のある岡橋純子さんにお話を伺った。もの以上に精神性が重視されていることに注目したい。

## 世界遺産の文化構造学

### グローバルゼーションのトポロジー

岡橋純子・談

四面門 (The Tetrapylon) シリア中部のホムス県、タドモルにあるローマ帝政期の都市パルミラ遺跡を代表する遺構の1つ。パルミラ遺跡は1980年、ユネスコ世界遺産登録。武力紛争による破壊が続く中、四面門も2017年に破壊されたとされる。 ©Pixabay

### 世界遺産委員会

——今年開催された委員会について、注目すべき報告やここ数年の世界遺産の保全状況などから伺います。

岡橋 第四一回世界遺産委員会は、七月二日から一二日まで、ポーランドのクラクフで開かれました。ニュースでは新規の世界遺産登録にばかり注目が集まりますが、登録審議に先立つ三日間では、既存の世界遺産の保全状況と保全課題が話し合われます。

私が注目しているのは危機遺産リストの機能の是非です。保全状況がよくなったと判断されると、危機遺産リストから外されます。今年は、いくつかの世界遺産が危機遺産リストを脱しました。

例えば、エチオピアのシミエン国立公園を見ますと、公園を横切る道路の建設計画がありました。道路によって生態系が脅かされます。ところが、二〇年前に危機遺産リストに追加されたのち、道路は公園を横切らず、迂回するよう計画が見直されました。またコートジボアールのコモエ国立公園のように、政情不安定によって密猟が横行していたところ、ガバナンス力の向上により密猟が減少し、象やチンパンジーなどの個体数も増加して約一五年ぶりに危機遺産リストから外れたという例も見られました。このような保全努力の成果は、世界遺産委員会でのうれしい報告です。

その一方で、新たに危機遺産リストに追加されるものもあります。今年の例となったウィーンについては、歴史的都市景観における高層ビル建設計画の見直しを促すため、危機遺産リストのツールとしての効用が期待されています。

危機遺産リスト入りは、状況によっては遺産価値への脅威にプレッシャーを与え、警笛となる効果があります。また国際的にも注視を促すこととなります。そういったことが、どれほど保全に有効であるかが注目されるところです。

今年、日本からは沖ノ島とその関連遺産が世界遺産に新規登録されました。この新たな世界遺産は、海を安全に渡るという世界共通の祈りや願いが信仰や儀礼のある顕著な形を通して表された例といえます。顕著で普遍的な価値とは、普遍的な人類共通の課題に対してどれほど特徴的な答えを見いだしてきたかに価値を置くこと、と捉えていいと思います。

世界遺産リストに登録される意義とは、登録された地元が自分たちの内で盛り上がるのに終わることではありません。厳しい保全義務のスタートですし、保全のメインアクターである地域社会が窓となって世界中の人の関心を集め、他の国や地域との連帯や交流を生み出す機会とやらねばなりません。

今回の世界遺産委員会では、私は主として大学関係者とNGOが座る席にあり、世界各地で利権や腐敗に抗して自然遺産や文化遺産の個別保護運動を展開するNGOの人たちが身近にな

る経験でした。各国から単独で会議参加している運動家たちがワールド・ヘリテージ・ウォッチという連盟を組み、団結しなければ一人で心細いとも思われる中、発言の際には、連盟メンバーが共に起立して発言者を支えていました。NGO同士の連帯です。政府間の連帯、専門家間の連帯、市民社会を代表するNGO間の連帯、国際会議ではいろいろな連帯が見られます。真摯な連帯、戦略的な連帯、国際協力とは連帯のうえに立っています。

この四、五年の世界遺産委員会では、シリア、リビア、イラク、イエメンなど、中東地域での武力紛争のために危機遺産リストへの緊急登録が相次ぎました。これらの危機遺産サイトについては、毎年の世界遺産委員会ですべてそれぞれの保全状況が確認されます。

武力行使のあった地域はアクセス困難になりますが、テロ組織や武装勢力から解放され、調査隊が入れるようになった所では、まず「ダメージアセスメント」および「現状の記録」が実施されます。管理が行き届かない中では、盗掘も起こります。人命の危機が去った後の破壊された文化遺産サイトでは、何が緊急で、何が緊急でないか、課題が緊急度合い別に整理されていきます。

シリアのパルミラでは、激しく損傷を受けたサイト・ミュージアムのコレクションがダマスカスへ移送されて保護されるなどの救急的措置にとどまり、本格的な修復はまだまだ保留状態

るものといえるのでしょうか。

岡橋 そのとおりで、世界にはさまざまな考え方や文化があり、さまざまなものを作ってきましたが、個々の国だけでは守れないこともあるので、地球全体を人類で守りましょうという言い方が分かりやすいと思います。世界遺産のロゴをご覧いただくと、菱形はモニュメント、文化遺産を表し、周りの円形は地球、自然を表します。つまり、文化と自然を包括的に守ることが表現されています。

普遍性と多様性が、考え方のベースにあります。普遍性と多様性は、ある意味で矛盾しているようでもありますが、世界的なシステムや条約への組み込まれ方に多様性を認めなければ、さまざまな異なった文化を持つ国々は除外され、国際条約としての普遍性は効力を持たなくなり

ます。

国や地域それぞれのシステムや受容の仕方、発信の仕方は文化そのもので、あらゆる地域や国が活用できるからこそ普遍的なシステムといえます。メッセージの普遍性を共有するためには、多様性をうまく取り込んでいくことが不可欠です。これが機能する限り、世界遺産のシステムは継続できるといえます。当然、世界遺産制度においては文化間の優劣は存在しません。

——多様性を尊重しつつ、普遍的なシステムをより広い国際的な協力とともにアダプトすることで、一地域や一国では難しいこと、保全、活用、そして利便性の確立と持続の可能性も高



聖シメオン教会 (シリア、アレクソポ郊外、5世紀。登塔者聖シメオンの記念建造物)。世界遺産「シリア北部の古代村落群」の一部。2011年に世界遺産登録、2013年に危機遺産登録。©Pixabay

まりそうですね。

岡橋 世界遺産が存在するのは、偶然以上に努力の積み重ねでもあります。例えば道路迂回の事例では、建設も遅れ、コストも膨らみます。しかし、国立公園として指定されている以上、守ることが前提です。

つまりパブリックなものに対する義務に関して、一方で道路計画は人々にとっての利便性を考えたものですが、環境への影響に配慮すること、そこに利害関係も絡み、国内だけの話し合いです。大きな軋轢が生じる場合、国際的なシステムによって解決へと導かれ、結果的に環境が守られることもあります。遺産への脅威ともなる開発の在り方は、自然災害や紛争に比べ、多くの人々の話し合いや連携の強さによって、よりよい方向へ解決しうるものです。

## 文化とサステイナビリティ

——世界遺産からは話題が少し離れますが、無形文化遺産として登録された和食に見られるような、モノの背景にある文化的精神性が認められ、広く知られるのはうれしいことです。世界遺産や無形文化遺産としての登録によって「世界的に知られる」ことで、身近な食を通して文化や環境問題への関心が高まれば、ビジネスとはまた別の文化遺産活用といえませんか？

岡橋 和食は、自然や四季を大切にしている日本の食文化、例えば素材の持ち味を活かしたり、味覚的には旨味の引き出し方があったり、四季

です。被災地の瓦礫を片づける際には、無秩序に一掃するのではなく、残した文化財を救出・保護・避難できるように配慮し、重機によって、さらに建物が崩壊しないように考慮されます。アレクソポでは、荒廃した市内に爆発物も残り、半壊した建造物は構造上不安定であるため、まだまだ安全な出入りができない地区が多い状況です。しかしモスクの再建については、既に検討されています。

## 普遍性と多様性の共存

——文化や伝統、思想の多様性はもちろん尊重されるべきですが、「世界遺産」の保全のためには、やはり国境を越えたレギュレーションも必要になり、世界遺産事業の理念とも共鳴す



の移ろいを感じさせる盛り付けの彩や器の美しさなどの視覚的なもの、年中行事と密接に結び付いた共食が展開されるなど、「和食をめぐる文化」の独自性が評価されました。食は、多様性、魅力、地方再生のキーだと思えますし、何よりサステイナブル、風土そのもの、自然と文化の融合、人が集まり交流する場を形成します。食育から会話を通して文化を学ぶことの有効性についてもよく考えています。

「塩はどうやってできるの？」

「この桃が採れた福島はどこ？」

「オクラはインドやアフリカでもよく食べているけれどもどのような味付けで？」など、食卓を通じて子供たちの視野や関心が広がるきっかけとなります。ユネスコの条約やプログラムの中で、世界遺産条約は食を扱いませんが、ブドウ畑や棚田など、農業の成せる文化的景観を見いだす意味での対象にはなりません。食は、無形文化遺産条約や創造都市ネットワークプログラムでは対象になります。

次にサステイナビリティの問題として、長期的に考えて行動すること、特に、次世代をイメージする必要性、どんな地球を残したいのか、というビジョンを明確にすることで、効率優先でなくても、「質の優先」に立ち戻ろうと考える人たちも現れると思います。全員がそう考えることは不可能でも、そのような選択をする人にスポットライトが当たるようになればいいのではないのでしょうか。

岡橋 文化財については、例えば日本では正式な法律文書の中で使われている言葉であり、文化財保護法、指定文化財、重要文化財、登録文化財。これに当たる英語は cultural property です。一九五四年、一九七〇年にユネスコで採択された国際条約ではこの用語が用いられています。

一九七二年の世界遺産条約からは cultural heritage が使われます。property が表すものはある枠組の中で、例えば国の指定する枠組の中での保護が決まった場合、限定的対象としての意味合いが強くなります。

World Heritage property とは、世界遺産リストに記載された物件を指します。heritage は、限定的な所有物というより、概念的な広がりのある語感を持っています。過去から継承し、未来へ受け渡すというニュアンスが強くなります。文化財は、個々に明確な所有ニュアンスのある対象物、文化遺産は、継承しなければならぬというニュアンスの強調。また文化資源は、何のための資源なのかを考えるとよいでしょう。

「経済的生産のため？」

「そこから何かを学ぶため？」

資源とされる対象が何を発信しているのかに注目すると分かりやすくなる言葉かもしれません。「財」は守る、「資源」は活用するものです。ですから同じものが、文化財として保護されながら、文化資源として活用されるわけです。保全、活用について付加すると、世界遺産、

——自然環境、人間社会、経済を満たすサステイナビリティを基礎付けるための取り組みとして、何が求められているのでしょうか。

岡橋 世界文化遺産を取り上げる場合、手を掛けてつくられたものほどサステイナブルです。建築に関しては、風土に適した素材を使用し、必要に応じてメンテナンスを行って使い続けることこそ、サステイナブルな在り方です。つまり、効率的に早く壊せ、早くつくれるという短期サイクルでのコストエフィシエンシーを優先させるのではなく、愛着をもって直しながら使い続けられるものづくりを目指す。そこに伝統や、高度な技術・労働、質の高い産物が生まれます。

これは、形として現れている物の背景にある精神やクリエイティブな楽しみの重要性を示し、利便性のみにとらわれないものを魅力あるものにしていきます。

歴史的建造物の修復を考えると、調査や修復の程度の見極め、そして実際の修復作業などに大変な時間を要し、場合によっては、すべて取り壊し、新たに建てるほうが時間もコストも掛からないかもしれません。しかし、それにもかかわらず保全するのは文化遺産の魅力、使い続けて住み続けることに、ある種、誇りのようなものを感じているからです。

——保全のための修復や復元技術は、伝統や文化、思想を伴っていないければなりません。また、そのような精神性こそ、次の世代へと受け継がれるべき本質なのではないかと、修復や復元に伴うオーセンティシティも問題になります。

文化遺産、自然遺産を守るとき、保全、保護、保存、維持、修復、復元など、それぞれに意味が異なります。例えば、保存と修復は、対立するところがあるのではないかという議論は一九世紀から続いています。

また保全、conservation は包括的な意味に使われ、重要資源として配慮しつつその機能を絶やさないという、一見意外な意味も含まれています。そう考えると、保全とは多くの人々が参加できる活動であるように、文化遺産が身近になるように感じられませんか。過去のものとして切り離すのではなく、現在の社会に生きているものとして文化と接するのが「保全」の在り



継がれるべき本質なのではないかと、修復や復元に伴うオーセンティシティも問題になります。

岡橋 修復の技術や思想の面でいえば、オーセンティシティとは何か、特に世界遺産条約で扱われる有形文化遺産については、当初は、素材や形状についていわれていましたが、加えて、技術、文脈、精神を含めたオーセンティシティへのパラダイムシフトが一九九〇年代以降起こりました。

このパラダイムシフトに、日本は大きな功績を残しています。それは木造建築とその建築・修復技術の伝統に誇りを持ち続けてきた歴史を国際社会に理解してもらわなければならないという強い意思によるものでした。木造は、石造と比べて素材が入れ替わっていきまますから。オーセンティシティ概念の多様化への貢献です。目に見えないもの、プロセスや精神をどう評価するかは、世界遺産の価値付けのポイントにもなります。つまり、偉大で、壮麗で、美しいものだけが世界遺産ではないのは、そういった見えないものの価値によります。その価値をどう伝えて共有していくかは、視覚的なものとは別に、インタビューレーションでの努力と工夫が問われます。

## 文化と保全

——文化財、文化遺産、文化資源など、いくつかの呼び方があり、それぞれに意味付けがされていると思いますが。

方です。

そのように捉える保全には、生き続ける、活用、サステイナビリティがつながっていますので、地域創生やグローバルなテーマとも関連付けやすくなります。これについては授業でも取り上げていますが、保全イコール凍結保存だけでなく既にあるものを「賢く使う」という意味も含まれるのだという、学生が意外だという反応をします。

## 「記憶」は「記録」

——「世界の記憶」という少し分かりにくい日本語が当てられている事業があります。これについて教えてください。

岡橋 ユネスコの「メモリー・オブ・ザ・ワールド」の発端は、人類の歴史を語るうえで記録として、文書の価値が見直されるべきであるというところで始まったプログラムです。対象となるものは手記、書籍、地図、タペストリー、写真、木簡などに込められた「記録」になります。

これらのアーカイブとしての管理や公開方法に注目が集まっています。味や香りを記憶（記録）として、どのように捉え、どのように継承すべきかは、とても重要な案件ではありますが、「メモリー・オブ・ザ・ワールド」プログラムの対象にはなっていません。

——無形文化遺産について、地域の独自性を重視すると、グローバル化の中で、芸能や伝統

技術のアイデンティティに関してどのように考えられるのでしょうか。

**岡橋** 無形文化遺産は、元々の発祥の地から離れて発展・変形しているタンゴやフランス料理、和食のようなものもありますが、大抵の場合、特定の地元でなければ再生できないことが多いのではないのでしょうか。

なぜかというところ、特定のコミュニティがくり出したものだからです。特定のコミュニティのアイデンティティに深く関わるものばかりです。その土地その土地の文化資源を見いだして拾い上げてみれば、その見直され方によっては、地域全体の魅力となりえます。

個人的な記憶が地域で共有化され、特徴づけられれば、グローバルの発信力の源泉となりえます。

——例えば郷土料理の地域性や特殊性についてはどうでしょうか。

**岡橋** それはまさに風土という言葉で表されると思います。特定の地域の自然の恵みや限定された地理的環境によって生まれるもの。そして、無数の個人が人生の中で大切にしてきた場所で大切な人と味わった記憶。それは普遍的に美味しいと感じられるものではないかもしれませんが、特定の地域で複数の個人が共通する記憶を持つていれば、材料や調理法などを記録して土地の郷土料理としてのアイデンティティを確立し、より広く多くの人に味わってもらうことも可能になります。

えも存在するのでしょうか。

**岡橋** 世界遺産の目的は、本来まず保全です。世界遺産登録されることは「守ります」と国際的に宣言するようなことです。

観光振興については、世界遺産条約では触れられていません。ただ、実際には、保全と活用の両面が大切で、つまり守るために使えないのは今日の社会の中の意義が薄れ、結果として、残っていくことが難しくなるかもしれません。それこそ世界遺産を「資源」として捉えた場合、一般的に真っ先に思い付くのが観光資源としての活用対象ですよ。

例えば富士山。富士山は特別な存在です。富士山の持つ力や意味は絶大で、世界遺産に登録される・されないにかかわらず、価値は変わら



ある地域の郷土料理を、毎日ではなくても特別なときに楽しむことで、ほかの国や地域の人々に関心を持ってもらえたら素晴らしいことだと思います。

例えば二週間チベット料理を食べ続けることができなくても、一度食べることでチベットに対する認識が身体化され、異文化体験としてチベットがより身近な存在となり、もっと知ろうとして文化交流のきっかけとなるのです。

——昨今、はやっている「本物と偽者」ではないにしても、固有の場所と時間から切り離されると、ちよつとした違和感を覚えます。ニューヨークでアメリカ人が握る鮎とか、オペラ座で見る歌舞伎とか、青い瞳の忍者とか。

**岡橋** 確かに、その土地を離れた瞬間、オーセンティックは成り立ちにくくなるかもしれませんが。和食文化も形を変えたものとして広がっています。その総体をグローバル化する和食と呼べるのではないのでしょうか。

日本人からすると、何かが違う、という感じがするとしても、私たちの文化が形を変えて受け入れられていることへの面白さがあります。無形文化遺産としての和食は、定義された譲れない部分、です。

しかし、言葉の定義だけ読んで和食文化を再現するのは難しく、その文化を生きて味わって理解するほかありません。

——世界遺産と観光ビジネスという視点で、保全以上に地域の活性化に重きを置くような考えはないという象徴的な事例だと思います。それでも世界遺産リストに登録されたことで、地域の更なる活性は促進されたでしょうし、世界中のどの世界遺産についても、広く知られることには大きな意味があります。世界的マッピングの中のひとつとしてリストに仲間入りし、地中規模で関心を持ってもらえる可能性が高まる、という点です。

観光振興は決して悪いことではなく、理解と交流の場として意味があります。ただ、観光客を増やす目的で何かをつくることに重点を置き過ぎるとひずみが出ることも確かです。場所の価値の本質を見失わない明確なビジターマネジメント、環境保全に配慮した規制管理は必要です。観光振興を優先にしまつては、その元となる資源の保全が忘れられてしまうおそれもあります。

ビジターマネジメントのうえでも保全は重要課題です。実際に富士山でいえば、入山制限や入山料の徴収なども行われています。私たち皆、ビジターとなる場合は当然、マナーを知ってから訪れること。また、困難は伴いますが、地元はビジターに対する啓蒙的な義務付けを徹底すること。訪れる側と迎え入れる側が、共に学ぶことが重要ではないかと思えます。

——ニューヨークの鮎ではありませんが、地域にだけでなく時間的にも、色、形、味、大きさなど、変化し続けているものを、無形文化遺産として定義するとき、それでは、鮎のどの

**★世界遺産** 一九七二年のユネスコ総会で採択された世界遺産条約に基づき、国際社会の連帯による「保全」を何よりの目的としている対象。顕著で普遍的な価値を持つとされる、有形かつ特定の土地から動かせない文化遺産・自然遺産が政府間会議で「世界遺産リスト」に登録され、各国の保全義務が国際社会によって見守られる。

登録候補は条約加盟各国から申請される。世界遺産は言葉として親しまれやすく、そのためその語感だけが一人歩きしてしまっている気もする。誰もが国際条約の条文を読み込んで理解する必要はないが、商品、コモディティのラベルやキャッチコピーに矮小化してほしくない。

世界が多様である中で、各地をつなげる共通課題を意識させ、自分たちの国や地域をはるかに超越した関心の広がりや皆に持たせられるような、魅力的なキーワードであり続けてほしい。

**★グローバル** グローバルとローカルをつなぐ。相対的に広い世界的目線で地元を見ることに始まり、地元ならではの「らしさ」を活かすイニシアティブ。

グローバルの生き生きとしたケースがきらきらと沢山出れば出るほど、ここでもやろうかな、といったインスピレーションが広がると思う。

**★サステイナブル** 次世代へ何を残せるかを考えるためのキーワード。社会、環境、経済が三つの柱とされるが、サステイナブルな状況を目指して行動するためのアプローチの軸となるのは文化的な背景。サステイナブルな開発・発展は、今日の国際社会の掲げる主たる理念。その目標として国連を中心にサステイナブルな開発目標が一七分野、そのため達成基準が一六九も掲げられている。

しかし、例えば経済発展の成長率がいつまでも持続可能であることはありえない。サステイナブルの意味をよく考えたい。サステイナブルであるには、バランスと助け合いが大切である。人類が「欲深」である限りは追求しにくい世の中の在り方であろう。私たちそれぞれが与えられた現状の中で、小さなことに喜びを感じたり感謝できたりすることが大切なのではないだろうか。皆が生き方を顧み、世代を超えた人類の長期的な幸せとは何かを探すためのヒントともなる。

**★オーセンティシティ** 真実性、真正性と訳される。何をもってホンモノであると信頼、評価できるのか？ 世界遺産をはじめとして有形文化遺産の価値付け、また修復・復元の際の技術的手段を決定するためにも考慮しなければならぬ文化遺産存在のあり方に対するビジョンの基礎である。世界遺産制度におけるオーセンティシティの考え方は、歴史的物証としての文化遺産の役割から、素材や形状が保存されてきている状態を尊重するところから始まった。

しかし条約加盟国が世界中に増えていくにつれ、オーセンティシティの概念そのものについての文化的多様性、すなわち差異は見逃せないものとなり、国際的議論が発展する。そして、文化遺産の機能、技術、精神など、目に見えないものやプロセスを含む方向でオーセンティシティの検討が拡大される。ヴェニス憲章（一九六四）と奈良文書（一九九四）を比較検討すると興味深い。

**★無形文化遺産** 二〇〇三年のユネスコ総会で採択された無形文化遺産条約に基づき、保護の対象となっている口承による伝統や芸能（民族音楽・舞踊・劇など）、社会的儀式や祭礼行事、伝統工芸技術、文化的空間など。ユネスコでは、かつてフォークロアといわれた民俗学的な範疇から発展してきており、国際条約が成立する前から口承および無形の文化遺産に関するプログラムは存在していた。ここでは世界遺産にもまして、「コミュニティ」が重要な鍵を握っている。担い手のコミュニティがしっかり存続してこそ継承される無形文化。消滅の危険性から守るために担い手のコミュニティを尊重したり育成したりする手段が重視される。世界遺産とはまた別の観点から文化遺産について考えるわけであるが、有形と無形は切り離しては捉えられない。日本や韓国では無形文化財を守る政策がもとめとあつたが、多くの国々にとってはユネスコによる国際制度がそのきっかけとなった。

**★ユネスコ創造都市ネットワーク** 都市を工芸、食、デザイン、音楽、映画、文学、メディアアートなどの創造的ハブにし、文化産業を誘致することによって発展・活性化を図る政策の見通しがユネスコ創造都市として認定された都市の間の連帯および国際交流をねらったユネスコのプログラム。そんな素晴らしいビジョンを持った日本の、世界の諸都市に注目！

部分を取り上げるのでしょうか。言い換えると、鯨の普遍性や本質を抽出することは、有形の世界遺産以上に、大変難しいのではないのでしょうか。

**岡橋** お鯨について言うのなら、時代や地域を超えて、または時代や地域の違いがあっても「譲れない部分」があるとするれば、それを本質として定義できるのではないのでしょうか。

五感を活かした文化の修練、習慣が真髓といえるものを生み出すのだと思います。でも、価値としての本質の理解を異文化圏まで広く共有するには、お料理が出来上がるまでのプロセスや技術を意識的に把握し、言葉でも定義すること。記録といいますが、明示することが重要だと思います。ちなみに、和食がユネスコの無形「文化遺産」として登録された際には、食をめぐる人々のスピリットが評価の対象となつたわけで、プロダクトとしての特定のお料理メニューそのものが文化遺産の対象になっているわけではありません。

また、無形文化遺産の場合は、世界遺産と違って、普遍的価値やオーセンティシティを厳しく求めてはいません。確かに無形文化にはダイナミズムがあつて当然で、例えば歌の節や舞踊の振り付けもそうであり、無形文化遺産は変化を伴ったり発展型があつたりしてもかまわない、という考え方もできます。

二〇一七年七月三日、東京都品川区にて。

## [ 岡橋純子の想い ]

### ユネスコ

私がユネスコで働きたいと考えたのは、中学生のときから漠然と感じていた「境界や違いを超えて分かり合うためには、文化を通じた尊重と共感が大事」という気持ちが、あの有名なユネスコ憲章の前文の言葉にぴたっときたのがきっかけでした。理念的でありつつ、実践的でもあります。そういう気持ちは今でも続いていると認識しています。文化はイデオロギー的扇動、プロパガンダにも有効に使われますから、文化政策というと清濁ありえますけれども、文化協力という行動意識は、自分にとって最もしっくりきます。

岡橋純子(おかはし・じゅんこ) 聖心女子大学国際交流学科准教授。東京大学総合文化研究科地域文化(フランス)研究専攻博士課程修了。博士(学術)。専門は文化遺産学、文化政策学、国際文化協力。歴史社会学的な視点から、今日の社会における文化遺産の位置づけとその活用、持続的発展の鍵としての文化の役割を追究。かつて10年近く国連教育科学文化機関(ユネスコ)のバリ本部にて文化局・世界遺産センターのプログラム専門官として各国、とりわけアジアとアフリカ諸国の世界遺産保全政策支援・アドヴォカシーに従事。

### 教育者として

地球市民として成長するとはどういうことなのか。グローバル社会を生きる学生にどのような価値を備えた人として歩んでいってほしいかと考えたとき、これまで大切に感じてきた概念が結び付いてきました。intelligence(理解力、思考力)、knowledge(知識、知見)、social awareness(社会意識)、proactivity(率先性、積極性)、independence(自立)、respect(他者の尊重)、empathy(共感力)。つなげるとINSPIREです。これにintegrity(誠実、高潔)も加えたいところです。教養はアクセサリーではありません。生き方そのものを支える力です。INSPIRE教育。学問を通じてそのような人間教育を目指したい。そのためには何よりも、自分自身が志をもって成長し続けなければなりません。

世界遺産は未来への

愛のメッセージ

人には

守りたいものがある！

世界遺産、無形文化遺産は多文化間、文明間の相互理解のための最良の教材になります。世界遺産の過去、現在、将来について、総合的、体系的にまとめられた必読の入門書を紹介します。アジアから初めてユネスコ事務局長に就任(一九九九―二〇〇九)した松浦晃一郎氏が、二〇〇八年に講談社から出版した『世界遺産ユネスコ事務局長は訴える』です。ユネスコ憲章は、その前文で「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」とうたっています。松浦事務局長は、この理念に沿った組織のトップとして、世界遺産、無形文化遺産、文化多様性について力強くリーダーシップを振るいました。その記録の一部でもあるのがこの著書です。

(編集部MY)

リ ッ テ ラ エ フ ー マ ー ニ オ ー レ ー ス

# Litterae Humaniores の力学

イリュージョン ポテンティア レゾナンス  
古代ギリシャ・ローマ「古典」～幻想と力の共鳴～

語り・河島思朗

人文学，特に西洋古典の魅力について河島思朗さんにお話を伺いました。古典というだけで，無条件に偉大であると崇められる幻想があります。しかし，そういった実際にはあまり読んでいない人々，本当のところはよく分かっていない「文化的な」人々の無責任な社会的共有情報（＝常識）とは別に，「古典」には，幻想も仮象も思い込みも，時には当の作家自身をも，すべてひっくるめて一気に飲み干し，絶え

間なく躍動し続けるようなすさまじいパワーがあります。そのようなパワーが顕在化するフェーズとして物語，神話をあげ，古典の力強さを中心に語っていただきました。

また，本稿制作は，知識交流から新しい価値を生み出す場，ITOKI Tokyo Innovation Center SYNQAにて行いました。ご同席いただきましたイトーキの皆様にお礼申し上げます。（編集部 HK）



『アルカディアの牧人たち』1638-1640頃，ルーヴル美術館。ニコラ・プッサン（Nicolas Poussin, 1594-1665），バロック時代のフランスの画家。



「われアルカディアにもありき」(1618-1622)ローマ国立古典絵画館。  
グエルチーノ (Guercino, 1591-1666)バロック期のイタリアの画家。

## 文意転生

「我もまたアルカディアにあり」  
エト・イン・アルカディア・エゴ  
et in arcadia ego は、近世以降、よく知られるようになったラテン語の格言で、さまざまに訳がありますが、「アルカディアにさえ私はいる」、あるいは「アルカディアにも私はいる」、

れますが、むしろ現実的な苦しみや悲しみを抜出すための非常に実用的なアドバイスという側面があります。

ゾンビが世界にはびこる映画『バイオハザードIV』で、人間が生き残っている場所がアルカディアと名付けられています。何でもないことのようにですが、そのように用いられることは、今日でも古典が生き延びている証でもあり、古典の力を感じます。

時には、本来の意味とは異なっていることもありませんが、キーワードとして生きているところに古典のしぶとさがあります。使う側からすると価値があるといえます。

## 古典の価値

まず、古典とは何かということですが、一般的な意味では、古いもの、オーソドックスなもの、時間の精査を経て今に残るもの、だからきつと価値があるのだろう、という考え方があります。その意味では、『神曲』(ダンテ)もシェイクスピアの作品もビートルズの楽曲も古典かもしれませぬ。

もう一つは、英語でクラシックスといわれる場合の古典があります。「西洋古典」と訳されますが、西洋古典が意味するところは、明確に古代ギリシャ・ローマ時代の著作物に限られます。いい方を変えれば、古典ギリシャ語や古典期のラテン語で書かれたものが古典である、と

の意味から二つおりに訳せます。

ブツサンの『アルカディアの牧人たち』では、墓碑銘を羊飼いたちが読んでいます。意味は、理想郷であるこのアルカディアの地にあつても、やはり死は人間から離れないということ。『私』を意味する ego は、「死」か「墓碑」か分かりませんが、文脈上「死」と考えられます。アルカディアは、実際に訪れたことがありますが、何もない荒涼の地です。ところが神話上では牧人たちの暮らす世界で、牧畜の守り神ヘルメース誕生の地でもあります。そういったことを踏まえ、現実のアルカディアを見たことがなかったウエルギリウスも、牧歌的理想郷の世界(現実には森はありません)としてアルカディアを位置付けました。もちろんテオクリトス(ヘレニズム期の牧歌詩人)からの文学的な影響もあります。

その牧歌的世界を、ウエルギリウスは意識的に理想郷として提示し、そこで牧人たちが歌います。そうすることで理想と現実(例えば内乱)との強烈な対比を示すことができます。つまり、アルカディアは幻想かもしれませんが、理想郷を歌うことで、内乱の社会状況といった現実をより強く感じさせる作品に仕上がっています。理想郷であるアルカディアにさえ、死は存在する。これは古代からのモチーフ「死を思い(emento mori)」とつながっています。そしてその裏返しは、「今を生きよ」という意味の carpe diem や「今こそ(すべて忘れて)飲もう」

なりそうです。キリスト教系文学を除き、紀元前八世紀の叙事詩『イリアス』(ホメロス)に始まり、五世紀の叙事詩『ディオニシアカ』(ノンノス)頃に終わる、ことギリシャに限れば、ヘレニズム期に先立つアルカイック期、古典期の作品を古典中の古典と呼ぶことができ、価値があるとみなされるでしょう。ただ、先行する時代の作品が学術的に文字化され、編纂されたのはアレキサンドリアですから、ヘレニズム期の功績はとて大きなものです。しかし、一般にヘレニズム期の作品は人気がありません。

の nunc est bibendum です。

背景には、人間は死を忘れてしまう存在であるということがあります。『アンティゴネ』(ソポクレス)の人間賛歌では、医療の発達により死に至るような病も治療可能である。それはすばらしいことであるが、しかし死を避けることはできない、と歌われています。医療は、ときに私たちに死を忘れさせます。しかし、たとえ死を忘れてしまうことがあつても、決して死はなくなりないという感覚も同時にある。そのような感覚から生じたのが「死を思え」です。carpe diem は、しばしばかつてよく引用されます。carpe は「花を摘む」ときに使われる動詞(命令法)、diem は「日」(単数・対格)。つまり「その日を摘め」、花が咲いている一番美しいときに摘めということから、「今を生きろ」の意味で使われます。

ところが、このホラーティウスの詩(『詩集』一・一一)は、実際には、女の子を口説いている詩です。いつ死ぬのかを占っている女の子に対して、そんな未来のことを占っていないで、今を楽しもう、だから一緒に飲みましょう、という詩です。

ただ、ローマは享樂的だったかという点、必ずしもそうではありません。ローマは快楽主義と考えられたこともありましたが、ホラーティウスの詩が成り立つ背景には、やはりシビリアな現実があつてこそではないでしょうか。文脈を追っていると、確かに享樂的な雰囲気を感じら

## 人気の古典・不人気の古典

古典にも人気作品、不人気作品があります。プラトーンはいつも人気があります。それでは、不人気な古典には価値がないかというと、そうとはいえません。まず、通常西洋古典といわれるものは、どれほど人気がない作品でも、二〇〇年以上の時間を生き続けていますので、少なくとも、生き残っているだけの価値はあります。

次に、クラシックスとしての価値についていいますと、規範的で、起源であることが重視され

「パンとダフニス」、パンが牧人ダフニスにアン笛の吹き方を教えている場面(2世紀、ナポリ国立考古学博物館 撮影・河島忠朗)。



★墓碑銘 'et in arcadia ego (エト・イン・アルカディア・エゴ)' の「私 (エゴ)」が埋葬された者=死者であると解され、「我もまたアルカディアにあり」へ変化した。『新英語大辞典』(研究社)にも 'I too (lived) in Arcadia' と語学的には無理な訳文がある(編集注)。

ます。この点から、プラトーン、アリストテレー  
スなどは、哲学の起源としての側面が強く、人  
気とも関係がありそうです。また現存する十分  
な量のテキストが価値や人気を示しています。  
そしてどこか規範的で、何らか起源であるとの  
認識がある作品は、人気がなくとも相応の価値  
が認められているといえます。ホメーロスやプ  
ラトーンやアリストテレー스는、規範中の規範、  
起源中の起源となる古典として受け入れられて  
いるのではないのでしょうか。

アリストテレー스는ともかく、プラトーンは  
読み物としても面白いことは確かです。対話編  
によって、どこまで哲学的体系を構築しようと  
考えたのかは別として、これも人気の理由です。  
もちろん好き嫌いはありますので、プラトーン  
よりもアリストテレースのほうが、ずっと分か  
りやすい、面白い、という人もたぶんいると思  
います。

キケローはラテン語散文の規範とみなすこと  
ができ、この功績が、キケローの評価を高めて  
います。

弁論というジャンルでは、デモステネースが  
時代的に先行し、キケローの作品への影響も見  
られますが、日本ではあまり知られていないか  
もしれません。

ウエルギリウスは、『牧歌』第四歌で、世界  
を救うことになる子供の誕生を歌いました。こ  
れがキリスト誕生を予言して歌ったと解釈され  
ウエルギリウスは、キリスト誕生以前のキリス

ト教徒とされました。

このことが、ウエルギリウスの作品のさらな  
る価値と人気獲得を後押ししたことは確かです。  
今日のヨーロッパでのキリスト教を考えると、  
古典への影響は多大であるといえます。相互に  
うまく作用し合って、役立ち合っているといえ  
るかもしれません。

## ミラクル・パワー、神話の力

そして後世への影響（役に立つ古典作品）と  
いえば、ギリシア神話を歌ったオウイディウス  
です。

まず、ギリシア神話とは、その多くが、オウイ  
ディウス、つまりローマ人によって伝えられた  
ものです。『変身物語』、約一万二〇〇〇行には、  
二五〇編あまりの神話が含まれています。これ  
だけの神話を今日に伝えている功績は偉大です。  
それでは、神話とはどのようなものでしょうか。  
ギリシア・ローマ神話は、人間に関することも  
含みます。一般には、人間に関することは伝説、  
神に関わることは神話という区分がありますが、  
ギリシア・ローマ神話は、個人的には、人間中  
心の話であると考えています。人間を含むこの  
世界を理解しようとするとき、人間を超える  
神々の存在（他者）が必要だったのでしょう。  
ギリシア・ローマ神話の神は、いわゆる模範的  
な神ではありません。人間以上に、人間らしい  
ところもあります。ある意味、神々は理不尽で

ト教徒とされました。  
このことが、ウエルギリウスの作品のさらな  
る価値と人気獲得を後押ししたことは確かです。  
今日のヨーロッパでのキリスト教を考えると、  
古典への影響は多大であるといえます。相互に  
うまく作用し合って、役立ち合っているといえ  
るかもしれません。

## 神話Ⅱ物語と歴史

神話はミュートスという言葉の訳語ですが、  
ミュートスは物語でもあります。つまり神話は、  
物語であり、文学でもあります。

物語はしばしばフィクションだとみなされま  
す。そうすると、神話は荒唐無稽なものである  
と考えられるかもしれませんが。既に古代でもそ  
のように思われることがありました。

ところがクインティリアヌスは、歴史は神  
話と同じくらい真実を語るものであり、歴史は  
詩作と隣り合わせで、いわば韻律なき歌である、  
つまり韻律を外した歌が歴史である（『弁論家  
の教育』）、と言います。

さらに、歴史とは物語ることであり、物事の  
是非を問うものではない、後世に語り継ぐべき  
ことを語るのが歴史である、と述べています。  
現代では、神話は虚構、歴史は事実の記述と考  
えられています。一九世紀後半ドイツのランケ  
による実証歴史学の樹立以降、客観的な記述が  
要請されるようになったからです。一方で、古  
典学的見地からは歴史もやはり語りではないか  
という問いは、常にあるように思います。真実  
を語るもの、という観点から歴史と神話を考え  
ることも面白いかもしれません。

だが、それはこの世界が理不尽で、人間の尺度  
ではすべてを説明することができないからでは  
ないのでしょうか。  
人間と異なる最たる点は、死なないことです。  
「死すべき人間と不死の神々」の対比が根底に  
あります。

## 神話は流動的

ギリシア・ローマ神話は、定まった不変の物  
語ではありません。時代ごとに作り変えられた  
といえます。ホメーロスでさえ、新たな解釈の  
もとに神話を生み出し、創作したのだろうと思  
います。

ヘレニズム期にもアレキサンドリアではさ  
まざまな神話が収集されますが、五〇〇年前、  
一〇〇〇年前のものとは、当然異なっていまし  
た。

しかし、このように、時代とともに（地域ご  
とに）変わっていくことが、実は、ギリシア・  
ローマ神話にとって大変重要なことです。神話  
には時代に合った内容、語り方が必要なのです。  
文学は神話を扱います。その際、既存のものを  
継承しながらも、そのままではなく、**改変**、**更  
新**するところに意味があります。ギリシア・ロー  
マ神話では、伝承によって父親が異なっていた  
り、別人と結婚したりします。神話が矛盾だら  
けなのは、神話の持つ流動性に起因します。け  
れども、このような矛盾が気にならないほど、

## 古典の力

常に改変されていく神話Ⅱ物語の力とともに、  
ホラーティウスに顕著に見られるような、格言  
化していく言葉の力が古典にはあります。

*carpe diem* もそうですが、言葉の魅力が詰  
まっています。感銘を受けるといえば、言い過  
ぎかもしれませんが、今、私たちが聞いても「分  
かる」、あるいは、その言葉を利用できる、使っ  
てみたくなる、と思わせるような普遍的な力を  
持っています。

当時のローマ社会においても、おそらくホ  
ラーティウスの思想は、極端に独自のものでは  
なかったように思われます。むしろ、常識的で  
誰にでも分かるものです。例えば、ローマでは  
中庸は重要な美德であると一般に考えられてい  
ました。ホラーティウスは、それに船の比喻を  
つけたうえで、黄金の中庸と表現します。以降、  
人々が中庸というときに「黄金の中庸」といい  
たくなるような魅力的な語の組み合わせを生み  
出しています。長々と中庸の大切さを語る以上  
に、黄金の中庸という言葉で、中庸の大切さを  
印象付けることができます。これはホラーティ  
ウスの功績です。そして個性性と普遍性の並存  
女の子（レウコノエー）を口説く言葉（*carpe  
diem*）は、「今日を楽しめ」という普遍性を獲  
得しています。

『変身物語』の個別的なエピソードは、意図  
的に普遍性を持たされています。オウイディウ



「リュラを弾くアポロン」古代ローマ時代のフレスコ画  
前27後14、パラティーノ美術館、撮影：河島思朗。



「パンテオン」ローマ皇帝ハドリアーヌスによって再建された万神殿、128年再建、ローマ、撮影・河島思朗。

でも、エウリーピデースの問題意識は十分に受け入れられたと思います。そしてそのような斬新さや普遍性を支えているのが、やはり神話の力であるといえます。

### 日本で読む西洋古典

大きく分けて、二つのことが考えられます。まず、今日のヨーロッパの人々は自分たちの文化の起源が古代ギリシャ・ローマにあると考えています。ですから、西洋古典は、ある意味で彼らの教養ということになります。グローバル化する世界にあつて、西洋の影響は顕著で、至るところに見られます。

このような状況のもとで、西洋の人々が自分たちの起源であると考えている文化を理解する。その古典を知る。それは、文化交流やコミュニケーションのなかで、現実的に役立ちます。

映画の中でアルカディアが用いられたり、ホメロスという言葉が権威の象徴として使われたりします。ジュピター、アポロン、キュービッド、ニーケーなど、神々の名前は商品名として利用されてきました。

ヨーロッパには、イタリア、フランス、ドイツなど、それぞれに独自の文化があります。しかし西洋としての共通性もあります。古代ギリシャ・ローマが、その共通性的一端を担っているのです。

二つ目は、二〇〇〇年以上にわたって読み継

とつながります。文学作品を読むことは、このようにとても実践的な側面も持っています。

### 古典への誘い

西洋古典は、あくまで一つの選択肢ではありません。特に、翻訳ではその良し悪しもあるでしょうし、耳慣れない固有名詞（神名、人名、地名）も多く、このこともハードルを高くしている要因の一つです。

しかしそのようなマイナス面を認めたとしても、また、時の精査を経た普遍的価値云々など全く気にせずに向き合ったとしても、純粹に面白いものが多いはずですよ。

どの時代の西洋の文学を読んでも、何らかの形で古代ギリシャ・ローマの、例えばホメロスや悲劇やローマの詩人たちの影響が見られることが多く、もちろん、文学に限らず、美術や映画においても同様です。

そういう意味で、ギリシャ・ローマの古典を知っておいて少なくとも損をすることはありません。そして少しでも元の言葉、古代ギリシャ語やラテン語に触れてみれば、意外な楽しさが見つかるとは思いません。特に、ホラーティウスは面白いフレーズに満ちているので、難しく考えずに、ラテン文学の雰囲気を楽しむには向いています。

とっかかりは、映画のワン・フレーズでも英語の語源を知るところからでも、建学の精神や

がれてきたことに注目すれば、何かそこには面白いものや普遍的なものがあるのではないかと期待です。

それは、人間をより深く理解する可能性へのまなざしだと思います。

### ヒューマニティーズの核

人間を対象として、人間について考える学問をヒューマニティーズ（人文学）といいます。西洋古典は、この人文学の中で特に重要な分野として位置付けられています。ヘレニズム時代以降、西洋古典は研究されています。その営みの大きな目的の一つは、作品に描かれる神々や人間を研究することで、人間についての理解を深めること。人間の新たな側面に光を当てることではないでしょうか。これが人文学だと思えます。

それでは、この観点で、古典文学をどう読むか、何を感じ取るべきか。

それは、個人的な好みと経験でどのように読んでもかまわないと思います。好みや趣向は人それぞれです。しかし、ある人は古典作品を読んで、悲しみが癒されるかもしれない。たとえ誤読したとしても、その人が癒され、元気になる。古典作品は二〇〇〇年以上の間、常に人々の感情に訴える何かを発信し続けてきました。だから私たちも心動かされる可能性が十分にあると思います。

図書館などに刻まれているラテン語のフレーズでもいいと思います。意外なほど、身近なところで見られます。

ハリ・ポッターやファイナル・ファンタジーの呪文にもラテン語が使われているそうです。老後の楽しみとしても、古典は尽きることを知りません。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。これを機に左記の入門書で、古代ギリシャ語・ラテン語に、ぜひチャレンジしてください！

- 河島思朗（かわしま・しろう） 東海大学文学部ヨーロッパ文学科講師。西洋古典学、ギリシア・ローマ文学、神話。
- ◎ 著書 『基本から学ぶラテン語』（ナツメ社）、監修 『ラテン語練習プリント』、『ギリシア語練習プリント』（小学館）、共著 『バスターナル―牧歌の源流と展開』（ヒナケス出版）。
- ◎ Via della Gatta (<http://www.viagatta.com/>)。
- ◎ 工芸青花：講座「ギリシア・ローマ神話」。



☆構成・編集部HK、二〇一七年、八月八日、イトーキ東京イノベーションセンターSYNQA (<https://www.synqa.jp/>)。

スもホラーティウスもウエルギリウスも斬新さを求めながら、普遍的な要素を組み込んでいます。エウリーピデースの作品は、伝統的な悲劇の設定からすると、斬新な試みがあったかもしれませんが、それが時代を超えた普遍性を獲得し、現代の私たちにとつてのある種の分かりやすさの獲得にもつながっているのではないのでしょうか。当時の観衆にも神話に基づく伝統的な普遍性のもとで、若干、斬新さが上回っていたとして、研究する意義の一つは、作品を紹介し、時代に合った翻訳を行うこと、多くの読者が読める環境を整備することです。研究者がいなくなり、誰も翻訳しなくなれば、数百年のうち、一般には誰も読めない（読まない）物になってしまいかねません。研究者の役割は、理由は何であれ、作品を後世に伝えることでもあります。ポンペイの壁に書かれた落書きでさえ、ある意味古典として人間理解を促すことがあります。誰かを元氣付ける可能性のあるものは、数が多ければ、多に越したことはありません。

そのためには、「古典、人文学は役に立たない

しかし、古典である以上、読まなければならない

い」という権威主義にあぐらをかいたような「良識」を語るのではなく、「人文学、古典はいつの時代にも役に立つんです」と堂々と主張すべき

だろうと思います。人文学はそもそも人間につ

いて考え、理解を深めようとするわけですから、

一番大切で、身近な学問です。

さらに、実践的でもあります。例えば、コミ

ュニケーションができれば、どれほど科学

技術が発展しても、おそらく役には立ちません。

日常、私たちが対話するとき、それはある意味で文学的な行為であるといえます。会話は文学の言葉にほかなりません。文学作品を読み、そこに用いられている数多くの会話をすることで、より一層、相手に気持ちを伝えることも、寄り添うこともできるようになります。相互理解へ

# 美は輝きだ

hamacken 文

本誌「フィロカルチャー」編集長、  
ビナケス出版・編集人。

## ラテン語の力

「死語」とされるラテン語が、本誌一二ページでもいわれているように、意外なほど、数多くのシーンに生きています。あるいは、生かされている。さしずめ、本誌冒頭特集に即して言えば、ラテン語は言語世界遺産ともいえるだろう（理由…保全され、活用され、観光には遠く及ばないが、ビジネスとしても極小マーケットが存在することは確か）。

何もアルカディア（牧歌的理想郷）やカルペ・デイエム（日を摘め）に限らない。古典的な真理に関するものや聖書に由来するものは、建学の精神や校訓、図書館などに掲げられていることが多い。ラテン語を選ぶ動機は、箔が付くとか、俗物的な権威主義によるハッターりかもしれないが、それに触れた者の中にラテン語のカッコよさを直観的に感じ取る者がいれば、それだけでハッターりでもインチキでも価値は十分にあると思う。

感じることに。カッコいいと感じ、好きにならなければ、取って付けたように口先だけで褒め称えられても、ラテン語も古典も喜びはしないだろう。ひけらかしや正論よりも理性、理性よりも、感性が先だ。



## 再び、ラテン語の力

「美しさとは輝きである」、このラテン語成句が新宿区高田馬場に立地する日本美容専門学校（日美）のエントランス、頭上に掲げられている。本誌版元哲学文化塾の母体である今道友信記念文庫の今道友信氏（三〇〇ページ参照）が晩年、校長、名誉校長を務めた学校だ。

このラテン語成句掲揚については、今道友氏の発案ではないという。そして一方、長々と述べさせていただいたように、この言葉は美の形而上学（新プラトン主義）を感じさせる。いやそれどころか、今道友氏が一九五六年に提唱したカロノロジアも（下記コラム参照）。

ラテン語成句を介し、日美の理念と美の形而上学が繋がったのはとても興味深い現象、そもそも、これまた今道友氏提唱の平和運動的な視座からの実践美学が、日美のいう美の実践者として形而下でつながったことが、今道友信美学芸術学科長誕生の契機のような話を聞いたことがある。しかし実践面を支える、深遠な形而上学的美学でもつながっていたのだ。それを示してくれたのが、ラテン語の力だと思いたい。



©Nippon Beauty Academy

日本美容専門学校本館、エントランスのラテン語成句、'PULCHRITUDO SPLENDOR EST (美しさとは輝きである)'。

## 美を求めて

感性の学として美学が始まったように、美と感性は親密だ。言葉も美術も建造物も自然も音楽も生き物も人間も、そこに美しさを見いだすのは感性によってであり、美の定義に従って検証したり、計算機で対象の美しさを算出するわけではない。

だから美の感じ方は人それぞれ異なっていて不思議ではない。人々が同じときに、同じ美しいものを見聞きして、同じように美しいと感じても、その美しさが同じである保証はない。また、同じ人物が、同じ美しいものを違うときに見聞きすれば、異なる美しさを感じることもある。

このように現実の物事に見いだされる美しさに同一性を確保できないとき、「それでは、そもそも美しさ、美そのものとは何か」と考えるならば、美の哲学、あるいは形而上学が始まる。

## もつと源流へ

誰がいつどこでどれほど美しいものを見聞きしても、寸分たがわず美しいといえる美しさそのものはこの世にはない。それは、美のアイデア

い中間者としての人間の精神は、思索の射程を神に及ぼすときも形成の射程を物に及ぼすときも、それぞれ対極的な意味において、悟性的な概念に基づく形相を超脱する力としての想像力を媒介とする。すなわち、人間の精神は、一方において非物質的な像への想像を介して概念の地平を超える理念へと飛翔し、他方において物質的な像への構像を介して概念の地平の底を破って物へと凝縮する。同様に、解釈にも物への下降と理念への上昇の2つの方向が認められる。伝統に対する革新としての芸術創造は、伝統における無（不在）に触発されて理念を形相として解釈する試みであり、それは作品の中に伝統における有（範型）としての形相を探索する通常の解釈とは方向を逆にしている。すなわち、解釈は、物質的な像としての作品の創造を通じて理念を形相へと現実化する精神の下降運動であるとともに、作品の意味解釈を通じて価値に向けて物質的な像から形相さらに理念（非物質的な像）へと上昇する精神の登高運動でもある（『美の存立と生成』）。

このように精神の上昇と下降を通じた想像と解釈を方途とする今道の形而上学的美学は、もはや神への信仰、理念への憧憬が過去のものとなった現代においても、人間が存在する意義を単なる生存を超えて求める者にとっては時代を超えた刺激であり続けるであろう。

大石昌史（慶應義塾大学）

©Saori Oishi

## もつと本質へ

美しさとは輝き（である）、原文はラテン語、プルクリトゥード・スプレンドル（エスト）。be動詞に当たる pulchritudo splendor (est)。be動詞に当たる est は通常省略され、古典的には、「真理の」を伴い pulchritudo splendor veritatis 「美は真理の輝きである」として知られる格言めいた言葉だ。物や表面的なことではなく、もつと本質的な輝き、もちろん「真理の輝き」なら、なお結構、それが本当の美しさだ。というような考えなのだろう。

## カロノロジア——存在と無を超える美への思索

カロノロジアとは今道が自らの美学を呼んだ学問名称である。この語はカロン、オン、ヌース、ロゴスというギリシア語の美、存在、理性、学問をそれぞれ意味する4つの単語を合成したものである。すなわち、この造語は美という存在を理性的に明らかにする学問を意味するが、さらに美を単なる存在ではなく存在を超えた光ないし輝きとして考えたいために、存在を超えている美という価値に理性的に迫ろうとする学問という意味が込められている。古来、経験を越えた存在や価値に理性的に迫る学問が形而上学と呼ばれた。それゆえ、カロノロジアとは美の形而上学にほかならない（『カロノロジア』『講座美学3 美学の方法』）。

このような形而上学としての美学の関心は、芸術にではなく、芸術の原理としての美にある。個々の芸術からはるかに隔たった芸術のアイデア（理念）としての美は、存在そのものとしての光であり、それはまた無の彼岸に立つものでもある。現象としての存在、存在の否定としての無、これらの彼方に立つ絶対的存在としての美を把握しうるのは、存在と無を超克する思索のみである（『東洋の美学』）。

美への思索を通じた存在と無の超克には想像と解釈という2つの道が考えられる。神でも物質でもな

このコラムは今道友信記念文庫の二つ折りのフライヤー作成に当たり（2015年）、大石昌史先生にご協力いただいたエッセーです。カロノロジアをコンパクトかつ的確に（特に最後のパラグラフは絶妙にして圧巻）解説していただきました。大石先生は学生時代に、今道先生の講義に出たのがきっかけで、美学芸術学へ進まれたそうです。2013年には、日本美容専門学校でもカロノロジア会でお話しいただきました。

（編集部HK）



# 哲学する プログラム言語

“Who Should be I?”  
モカ——談



## AIが流行っている

データと経験知を駆使し、将棋や投資で好結果を出している。自ら考え、判断している「ように見える」。しかし、この「ように見える」は、私たち人間にも妥当するのではないか。AIが意識を持ち、思索する環境を観察すれば、感情、意識、心、魂など（そのように認識されているモノ）、物質的ではないとされてきた人間の「神秘的」な属性誕生のプロセスが解明されるのではないか。AIから人間の本質を考える、このテーマにフィットしそうな、専門学校でプログラミングやデザインを教えている、モカさんに聞いた。

（編集部HK）

データと経験知を駆使し、将棋や投資で好結果を出している。自ら考え、判断している「ように見える」。しかし、この「ように見える」は、私たち人間にも妥当するのではないか。AIが意識を持ち、思索する環境を観察すれば、感情、意識、心、魂など（そのように認識されているモノ）、物質的ではないとされてきた人間の「神秘的」な属性誕生のプロセスが解明されるのではないか。AIから人間の本質を考える、このテーマにフィットしそうな、専門学校でプログラミングやデザインを教えている、モカさんに聞いた。

他人の意識も動物の意識も、存在しているとしても、証明することは、今のところできない。なので、AIに「意識」が存在しても、分からないです。  
**AIに哲学は可能？**  
哲学をすることが可能かどうかについては、可能だと思います。  
機械と生物は同じようにならないと考えがちですが、対照的なものでも、道のりは違っても、同じような結論に行き着きます。

音楽というなら、アナログ音源とデジタル音源のように音の記録法が違ってても、技術力が高まれば差が分からなくなり、聴き分けることが難しくなります。ほかには、感覚的に直観して導き出した結論と、論理的に思考して導き出した結論が、ピッタリ同じ答えを

出すこともあります。なので、機械だからといって、生物的にはならないとはい切れないのです。  
AIにとって大きな飛躍になる要素として、量子コンピュータは重要になります。量子コンピュータは、従来のコンピュータが0と1で判断していたものを、0と1とは判断せず、曖昧さで思考することができるからです。それは、人間の思考にとってもよく似ています。

私たちは、0か1かハッキリ区別せずとも、何かを決めることができるでしょう。なので、量子コンピュータによってAIは、より人間的な哲学をすることが可能になるでしょう。  
**存在、有と無**  
存在とはあること、有です。存在しないとはないこと、無です。無は全くの無で、そもそも概念すら存在しないことだと思っています。有は存在していること、そして、存在していると表



最近、「貢献」と「今の瞬間を生きる」をテーマに生活しています。水曜日、学校でウェブデザインを教えています。月曜日は、自身が経営するお店で、スタッフと一緒に働いて、お客さんと話しています。

ほかには、日常的に困っている人がいれば、悩みを聞いたり、ネットで悩み相談の窓口も設け、ビデオチャットで相談に乗ったりしています。やっていくことは、バラバラのように思えますが、私の中では「貢献」と「今の瞬間を生きる」をテーマに一貫していること、結果的にこんなライフスタイルになりました。

このバラバラ感は、何かの目的のためにつながりそうな気がしています。中でも悩み相談は、気付けられることが多く、得られるものが大きいです。そして、私は何より考えることが好きなので、一緒に考え、役に立てて安心して相手の顔を見ると幸せを感じます。

最近、「貢献」と「今の瞬間を生きる」をテーマに生活しています。水曜日、学校でウェブデザインを教えています。月曜日は、自身が経営するお店で、スタッフと一緒に働いて、お客さんと話しています。

ほかには、日常的に困っている人がいれば、悩みを聞いたり、ネットで悩み相談の窓口も設け、ビデオチャットで相談に乗ったりしています。やっていくことは、バラバラのように思えますが、私の中では「貢献」と「今の瞬間を生きる」をテーマに一貫していること、結果的にこんなライフスタイルになりました。

このバラバラ感は、何かの目的のためにつながりそうな気がしています。中でも悩み相談は、気付けられることが多く、得られるものが大きいです。そして、私は何より考えることが好きなので、一緒に考え、役に立てて安心して相手の顔を見ると幸せを感じます。

と裏も存在することになります。なので、私たちがこの世界に存在しているなら、きつと死んでも、生きている分の反対の側面が現れることになると考えています。それは、死後の世界なのかは分かりませんが、生きた分の何か裏で育っていると思います。有とは、そんな性質のものだからです（左図参照）。



生きる意味とは、個でいえば「幸せになること」、集団でいえば「成長するための情報を伝達すること」だと思います。そして、集団に効率よく「成長するための情報を伝達すること」をさせるには、個々が成功すれば、報酬を与え、失敗すれば、罰を与えるよう

その報酬というのが「幸せ」を感じることで、これは、AIを育てるプロセスにも似ています。私たちが、創造主の目的のために働かされているのかもしれない（笑）。とはいえ、「幸せに生きること」そこにこの世界すべてにつながる意味があると思っています。  
**善と悪**  
絶対的な意味での善悪はないです。善悪というのは、見る方向によって変わるからです。例えば、人を殺すことさえも、戦争では、敵を殺せば善になります。テロリストは悪でしょうか？見方によっては英雄です。ロボットに支配された世界は、ロボットにとっては平和で善です。そんな世界を壊そうと立ち向かった人間たちは、ロボットにとってはテロリストですよ。

倫理は、「社会規範」。道徳は、「人としての生き方」。倫理は、大勢が悪だと思えば悪、善だと思えば善、という風に決まります。道徳は、大まかな方針はあっても主観によって変わります。倫理は人をコントロールするためには守らせるものなので、倫理より道徳に従って生きたほうが良いと思っています。

実際にあつた事件ですが、高齢者の夫婦の妻が難病を患い、苦痛に耐え切れず、夫に「殺してほしい」と頼み、夫が妻を殺し、山に埋めました。その事件を知ったとき、安楽死の認められない日本では、いかなる理由があるうとも人を殺すのは悪だが、自分が罪人になろうとも、相手を思いやる気持ちや優先し、妻を苦痛から開放してあげた夫の行動に、本当の愛を感じました。この事件、事情が明るみになって夫に共感する人が多ければ、倫理的には善になるかもしれませんが、基本的に、倫理的にも許されない行為だと思ふ人のほうが多いかもしれません。

電車で化粧をするのも、世間の倫理は悪です。けれど、私の中の道徳では、人に迷惑をかけなければいいと思えます。そして、多くの人が迷惑だと思ひ込みすぎるのは悪だと思っています。  
**真実と真理と哲学**  
真実は結果。真理は法則。真実も真理も、この世界の本当の結果と法則であつて、人間には仮説を立てることはできて確認するすべがなく、知りえないもの。哲学とは、この世界の真理の法則について仮説立てて考えること。

モカ 株式会社UNI代表。女装サロンの「女の子クラブ」を経営、キティッド・アカデミー講師（プログラム&デザイン担当）。新宿、銀座でホステスを経験。日本最大の女装イベント「プロバガタ」の創設者として知られる。男性として生まれ、性転換手術後、戸籍の性別を女性に変更。二〇一五年一〇月、二階から飛び降り自殺を図るが、車上に落ち、複雑骨折で、後遺症もなく一命を取りとめる。著書『迷いさこの感じる哲学漫画』。

18 August 2017, Minato-ku, Tokyo.

この秋は朗読劇で！

W・シェイクスピア

# 『ペリクリーズ』

こぎやち



お芝居レトロ鍋  
×  
制作  
座談会

**夏目** 現役で俳優をしているメンバーが多く集まってきたボランティア団体「レトロ鍋」で歌や演奏、紙芝居やオリジナルの寸劇など行っていたんですが、そのレトロ鍋を母体として、本格的に演劇を行うため「お芝居レトロ鍋」というカンパニーを作りました。ちょうどその矢先に、この企画のお話を頂いたので、チャレンジさせていただくことにしました。

**さいけ** 自分の劇団（ポポポ）を立ち上げてから、外部で演出する機会が少なくなっていて、そろそろ外部でも演出を手がけたいなと思っていました。特に、シェイクスピアだったことも決め手です。10年以上前、シェイクスピア作品を解体してアレンジする企画で、偶然『ペリクリーズ』を引き当てたことも何か縁を感じています。  
**夏目** そう、シェイクスピアは、ずっと演じてみたいと思っていた作家。でもどの作品にも、これまで不思議なほど縁がなかったんです。

多いので、逆に、生で聴く言葉の力や、引き込まれてしまう詩的な響きを楽しんでもらい、物語の魅力をしっかり届けたいと思います。

## サウンド

**cue** 弦楽で背景の広がりを作り、その上にピアノを乗せるイメージなんです。時代考証的な視点にはとらわれず、かといってサンプリング音源を使うことも考えてなくて、比較的シンプルな音色で、特に、海を、波の音などのSEを使わず、どんな風に表現できるかが重要だと思っています。

## メッセージ

**さいけ** 生の声を持っている力を感じてください。シェイクスピアは面白い、と思って、ほかの作品も観てもらえるようになれば、うれしい。物語の言葉をしっかりと丁寧に届けます！複数の役をこなす役者の替わりっぷりにもご注目ください。



**cue** 作曲と演奏（鍵盤）を担当させていただきました。長年音楽畑で活動してきました。そして昨年加入したボランティア団体「レトロ鍋」を通して今回のオファーがあり、お受けしました。これまで、即興劇に音楽を付けるお仕事は何度か経験がありますが、台本のしっかりした長編作品はともやりのないところではないかと思いい、挑戦させていただくことにしました。

## 朗読劇というスタイル

**さいけ** シンプルに朗読するだけでも、その場で、生で聴くことに意味があると思うんです。メディア（ラジオや録音されたもの）にはない、生の声を持っている力を体感してほしい。それに、パフォーマンスも要素としてありなので、文字どおりの朗読劇にはなりません。  
**夏目** それに劇場では、お客様の反応によって、その都度、違うものになっていく面白さもあります。

この度、『ペリクリーズ』に出演いたします多賀啓史です。

舞台の世界に初めて身を投じたのは20歳の頃だったと記憶しています。今はもうなくなってしまう赤坂の劇場での、アメリカを舞台とした家族劇でした。その後ポツポツと、さまざまな作品に携わらせていただいておりますが、脚本は現役の作家の方が書かれたオリジナルがほとんどでした。

そして、シェイクスピア作品は初となります。本を読んだり、劇を観たりといったことはありました。その度に「いつかは」という思いと「できるのだろうか」という思いを抱いていました。ご縁から遂に「その時」となり、今は身の引き締まる思いです。

今回は朗読でその世界をお伝えすることになります。観劇する方々の想像力におすがりすることも多々あるかと存じますが、一つ一つ紡いでいく言葉がその一助になればと願っています。作品に挑んで参ります。レトロ鍋版『ペリクリーズ』是非お楽しみください。



©KEN プロデュース



左から、cue（作曲）、さいけ（演出）、夏目祐里（出演者代表）。2017年8月7日、東京都港区。

## シェイクスピア

**さいけ** 言葉、言葉、言葉ですね。役者がどう語るのかが、聴きどころ／聞かせどころだと思う。特徴的な、長く詩的で、非日常的な文学性の高い言葉をどうやってお客様に届けるのか、この詩的空間への誘いが非常に魅力的なんじゃないかな。役者にとっては簡単じゃないけど、挑戦する価値があるのは確か。

**夏目** そういう意味で、動きの少ない朗読劇では、しっかりと台詞（シェイクスピアの言葉）を聴いてもらえるんじゃないかな。『ペリクリーズ』の中にある、人間の普遍的なものを感じるには朗読劇はいいと思う。

**さいけ** 古典的な作品では、ストーリーは観る前からお客様も分かっているケースが

お芝居レトロ鍋版  
朗読劇・シェイクスピア  
『ペリクリーズ』  
W.シェイクスピア作 さいけ（劇団ポポポ）演出  
協力：KENプロデュース

小坂 広夢 多賀 啓史（KENプロデュース）  
以下、レトロ鍋  
夏目 祐里 大蔵 紫乃  
小嶋美奈子 栗須慎一朗  
暁 雅火  
文京区立オーストラリア有志 七尾美  
（ごまぐレホン酢）（演奏）  
cue（作曲・演奏）  
木村 経世（編曲）

トーク・ナビゲーター  
門野 泉  
主催：哲学文化塾

お問い合わせ / fax:020-4662-3528, e-mail:info@philoculture.jp  
平成29年11月18日（土）、12月9日（土）・各2回公演  
☆昼の部：13：30 開演、★夜の部：18：00 開演、料金：2,500円（18歳未満1,800円）  
※昼の部のみ、上演後、シェイクスピアが“もっと面白くなるスペシャル・トーク”を行います。  
※開場は開演の30分前になります。

会場：日本美容専門学校 校友会館地下1階 JR 山手線、西武新宿線、東京メトロ東西線 “高田馬場” 駅より徒歩5分。

お芝居レトロ鍋：ボランティア団体レトロ鍋のメンバーで構成される演劇ユニット。既成のものからオリジナルまで様々な作品を上演。オリジナルの紙芝居も制作&上演する。●url → <http://www.retro-nabe.com/> ●blog → <http://s.ameblo.jp/retro-nabe/> ●twitter → @retro\_nabe



# シェイクスピアは 隠れカトリックだった？

## ✠ シェイクスピア

シェイクスピアの時代、それはカトリック教会、カトリック教徒にとって、限界を超えた大受難の時代でした。カトリック教徒はミサにあずかれず、隠れカトリック教徒であったのです。シェイクスピアの作品は、この隠れカトリック教徒への贈り物であった。したがってシェイクスピア演劇の真の材源は聖書であったのです。この視点が二〇回の講義を貫いていました。この興味深い講義が森永エンゼル財団のインターネット電子図書館の森永エンゼル・カレッジのホームページで公開されています。まずはアクセスしてみてください。

今から半世紀前に、英文学者の中野好夫先生は、『シェイクスピアの面白さ』（新潮選書）の中で、「シェイクスピア演劇はまず浅草芝居のノリで存分に楽しむことだ。蘊蓄を傾けたり、学問的な話はその後だ」と語っていました。ところが、このたび英文学を初めて受講した私にとって、上智大学名誉教授のピーター・ミルワード先生の講義は、驚きの連続だったのです。

織し、聖母マリアへの祈りをミサの代わりに一五〇回唱えることを勧めていました。ロザリオの祈りは「喜びの玄義、悲しみ・苦しみ・苦みの玄義、栄えの玄義」の三環からなり、これはシェイクスピア全作品の「喜劇、悲劇、悲喜劇」に対応すると解釈されたのです。そして、悲喜劇の作品事例として『ペリクリーズ』を取り上げました。

第一層の『ペリクリーズ』の粗筋を話しておきます。舞台は紀元前三世紀の地中海東岸と北アフリカ。大国アンティオキアの王は、娘の王女と悪徳の近親相姦の関係にあり、それを見破ったタイアの文武両道の若き領主ペリクリーズを恐れ、大事にならぬうちに亡き者にしようとして刺客を放つ。ペリクリーズは祖国を忠臣に託し、艱難辛苦、波瀾万丈の大冒険の船旅に出る。しかし、最後には死亡したはずの愛娘マリーナに再会し、続けて死者として嵐の海に葬られた妻タイーサに、エフェソスのダイアナ神殿で再会する、まさに大団円の結末の物語です。

次は第二層です。第一層の粗筋が、シェイクスピアの手にかかり、舞台の上での台詞になると、観客は皆感嘆と感動で涙を流し、日頃の日常生活の悲しみ・苦しみが、心の奥底に湧く愛の力によって浄化されるのです。隠れカトリック教徒、英国国教会教徒、プロテスタントの観客たちに、キリスト教の精神性は共通しており、舞台の演技と照応しているからです。

第三層は隠れカトリック教徒に向けてのシン

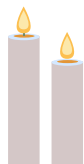
世俗的物語の面白さに加え、蘊蓄を傾け、学問的探求をたつぷり体験させてもらったからです。その驚きをまずは整理しておきます。

①カトリック信仰の視点 ミルワード先生は、シェイクスピアは英国国教会の忌避者だったばかりでなく、固くカトリック信仰を守り続け、自分の創作した全演劇を通して自らの信条を表現し、努力した人だったと語っています。先生は全戯曲の演劇台本、そして聖書をすべて暗唱しており、シェイクスピアが先生の心の中に生き続け、シェイクスピアが聖書について語っていると感じさせる講義でした。

②メタドラマの視点 ミルワード先生はドラマの背景、台詞の背景に隠れている、真のねらいを解釈するメタドラマという手法を考案し、それを三層から説明しています。第一層は舞台上で演じる物語を世俗的に解釈する次元です。それは、とにかく面白く、ビジネスとして観客を集めることです。第二層からメタドラマで、第一層の下に隠れている宗教的解釈の次元です。隠れカトリック教徒、英国国教会教徒、プロテスタントに共通する聖書からの解釈です。第三

ボルの解釈です。一六〇六年の法令でキリスト教の神の名前の使用が禁止されていたので、共和制ローマの時代の神々と互換性を付けたのです。父なる神はジュピターで、神の子イエス・キリストをアポロに、聖母マリアを純潔の女神ダイアナに言い換えました。この言い換えは、英国国教会教徒、プロテスタントの観客にも分かっていたと思います。さらにそのうえで隠れカトリック教徒にとって大切なシンボルがあります。聖地エフェソスです。

## ✠ 聖母マリア崇敬の聖地「エフェソス」



エフェソスは現在のトルコにありますが、中世ヨーロッパのキリスト教徒にとっては、聖母マリア崇敬の聖地であったのです。そもそも聖パウロにとっては、エフェソスは異邦人伝道の最重要拠点でしたし、聖母マリアはお供に聖ヨハネを連れて、ここで余生を送り、ここで逝去したと伝えられていました。四三一年のエフェソス公会議で、「受肉した神の子の母、聖母マリア」の称号と「三位一体の強化」を決議してからは、聖母マリア崇敬が聖地エフェソスを中心にキリスト教徒に大きな影響を与えることになったのです。

ペリクリーズは、愛娘マリーナと再会する場面、聖母マリアを賛える中世の賛歌「やさしき救い主の御母」を踏まえ、マリーナに聖母マ

層はミサにあずかることのできない隠れカトリック教徒だけに分かるシンボルを解釈する次元です。

③シェイクスピア全作品を俯瞰する絨毯模様の視点 ミルワード先生は研究者にとって大切な仕事は、シェイクスピア全作品を絨毯模様に例えて、その模様を解釈することだと語っています。そしてこの課題に、①のシェイクスピアは隠れカトリックだったことを文献資料で裏付け、②のメタドラマ手法を使って各作品の解釈を試み、最後に③の全作品の絨毯模様を読み解いたのです。

## ✠ 作品研究・メタドラマで読む『ペリクリーズ』

一般的には、シェイクスピア作品を喜劇、悲劇、史劇に分類しています。この分類は第一層の世俗的解釈に基づいたものです。ミルワード先生はメタドラマ手法を使って、全く新しい分類を提起したのです。イエズス会士たちは隠れカトリック教徒のために「ロザリオの会」を組

リアの御姿を重ね合わせます。この賛歌で「自然の驚異のうちに、御身の聖なる救い主をお産みになった御方よ」と歌われているのです。マリーナは海路で生まれたことに因んで付けた名前です。聖ベルナルが「海の星」として強調した聖母マリアの称号です。ペリクリーズはマリーナとの再会により、絶望の淵から、新しい命を与えられたのです。さらにハッピー・エンディングは、ペリクリーズとマリーナがエフェソスの女神ダイアナの庇護のもとで、巫女として務めているタイーサと再会を果たしたのです。これはイタリアの新プラトン主義によって作られた貞操の女神ダイアナと聖母マリアが対応すると解釈されていたからです。

以上が『ペリクリーズ』の作品のメタドラマからの解釈です。ミルワード先生は、同様の手法で、例えば『オセロー』のデズデモーナ、『リア王』のコーデイリア、『冬物語』のパーディタ、『テンペスト』のミランダの解釈にも使っています。これらのヒロインに聖母マリアの愛と慈愛を見いだしていたのです。

このエッセイでは、ミルワード先生の二〇回の講義のごく一部しか紹介できませんでしたが、この一月には創文社から『ミルワード神父のシェイクスピア物語』の書名で出版の予定です。森永エンゼル財団の電子図書館のコンテンツと合わせて活用していただくことを願っています。

（注）森永エンゼル・カレッジ (<http://angel-zaidan.org/category/shakespeare/>)



# フィロカルチャーな イベント・レポート

哲学文化塾企画、2017年、5月、8月、9月に千葉県船橋市のコミュニティハウス・ヴィリジアン（石井食品株式会社本社1階）で行われたイベントをレポートします。11月、12月は、東京都新宿区高田馬場の日本美容専門学校・校友会館で開催します。



佐藤二葉 丹澤美緒

## ひとりギリシア悲劇

5月13日は、佐藤二葉さんによる「ひとりギリシア悲劇『アガメムノン』」を上演。2014年の初演以来、断続的に再演されている人気演目です。

「学者」以上に研究されていて、お勉強対象としてだけの研究ではないので、作品との妙な距離もなく、およそ2500年も前の作品が、違和感なく彼女とともに息づいていました。



佐藤二葉(さとう・ふたば) 俳優、演出家、リュウアー奏者。「古代ギリシャナイト」祭儀シーンの演出、出演ほか、東京学芸大学、国際基督教大学、朝日カルチャーセンターなどで、ゲスト講師を務める。『うたえ！エーリンナ』(ツイ4)にて連載中。  
<https://twitter.com/baccheuo>

の世界へ吸い込まれてしまうような、行き届いた繊細かつ大胆な演出にして、すばらしいレクチャー。本編では、登場するすべての人物をきめ細やかに演じ分け、また、パフォーマンス・アシストの丹澤美緒さんとの息もピッタリ。

今回は、日本語による上演でしたが、解説付きで古典ギリシア語による響きを体感できるような機会も作ろうと思います。



夏目唯理

## 夏ライブ！ ザ・平成ジャズ浪漫

8月5日は、萩尾しの(VO)、杉山美樹(pf)、村谷ゆうすけ(bs)、宇山満隆(dr)という強者たちの協演。第1部は、スタンダード。萩尾しのさん、艶やかな和の素材にドレスチェンジの第2部では、日本のポップスをジャズ・アレンジという、トークセッションのテーマ、グローバルカレッジーション感たっぷりのステージとなりました。しのさんのMCは、毒素もたつ



佐藤二葉 松田義幸

るのではなく、現代社会の問題を重ね合わせで考え、よりよい生き方や問題解決のヒントを得るリソースとする。学術研究ではなく、古典も芸術も私たちの関心領域へ引き寄せ、積極的に活用しようということです。同時に、古典や芸術と「正しく」向き合うことも忘れてはなりません。その意味で、今回のトークは、二葉さんの人文的解釈と松田義幸さんの社会的解釈が補完し合い、源流からの流れに乗った本質的なモチーフが描き出されたのではないかと思います。タイトな時間制約の中で、臨機応変に対応し、進行を管理したMCの夏目祐里さんもナイス・ジョブでした。



萩尾しの・第1部より

ぱり、独創的に軽やかにして吉妙。パネルトークは、石井健太郎さん、松田義幸さん、さらに哲学文化塾の母体でもある今道友信記念文庫にとっても縁のある、今道友信さん(友信先生の次男)をパネリストに迎え、また友信先生の奥様、クリスティエさんにもお越しいただきました。ジャズのグローバル化を例に、それぞれ専門分野から見たグローバルカレッジーションを中心に語っていただきました。



萩尾しのの(はぎお・しの)幼少時よりクラシックギターとピアノを習う。江東区オーケストラ大会でチャンピオンに輝く。ゴスペルグループでは、国際フォーラムAホールやパシフィコ横浜でソロも担当。歌とMCのギャップに注目！ <https://twitter.com/shinohagio>

速報！ 哲学文化塾講座・フィロカルチャー2018→「(仮)ギリシア悲劇の世界」開講！ 講師：佐藤二葉。2018年1月より、驚きの実践的ギリシア悲劇講座が高田馬場で始まります。詳細はホームページやtwitterなどでご案内いたします。お問い合わせ：info@philoculture.jp



萩尾しの 今道友信



石井健太郎 松田義幸

奏もしていただきました。今回は、パネリストの人数も多く、テーマもやや抽象的で扱いにくいところを、MC彩未理加さんの先導で、何とか、ほぼ予定時間内に終えることができました。

## 朗読劇『ソクラテスの弁明』

9月30日は、オーディエンスを陪審員に見立て、かの有名なソクラテスを陪審員



明神聰(みょうじん・さとし) (左上) 1960年代に日比谷野外音楽堂で上演されていた東京大学ギリシア悲劇研究会によるギリシア悲劇興行に参加。ホメロスの『イリアス』の実演家として知られる。大学や学会、カルチャーセンターでのパフォーマンスのほか、古典ギリシア語教材の朗読・朗誦がCD化されている。

再現。口上はミュージズの女神クレイオウ(彩未理加)、リミックスは楽人オルフエウス(Taisuke Kurosumi)、そしてソクラテスは、ホメロス・パフォーマーで知られる明神聰さん。ソクラテスの声の背後にホメロスが聞こえてきそうな弁論。パネル・トークのテーマは、もちろん哲学。佐野好則さんには、作品・思想を文学史的視点も配慮した解説を頂き、モカさんは、自然哲学(科学哲学)的視点からの独自見解を披露、哲学の必要性に言及されました。松田義幸さんは、ソクラテスと弟子たちの関係とイエスと弟子たちの関係の対比から、類似性を導き、現代の世界的危機への警告を、また、明神さんには、『イリアス』第16歌の冒頭を実演していただきました。まさに、現代のラプソドス！しかし、実はアオイドスでない点が、とても興味深いのです。

進行は、時間の関係で(着替えの間もなく)、ご覧のとおり、女神クレイオウにお勤めいただきました。(編集部HK)

写真①明神聰(パネリスト)、②「朗読劇・ソクラテスの弁明」、(左から)楽人オルフエウス(Taisuke Kurosumi)、【『ソクラテスの弁明』の著者プラトン胸像パネル】、女神クレイオウ(彩未理加)、ソクラテス(明神聰)③佐野好則(パネリスト)、④モカ(パネリスト)、⑤松田義幸(パネリスト)、⑥彩未理加(MC)、⑦パネル・トーク「哲学/哲学者は役に立つのか」、(左から)hamacken(FC)、彩未理加、明神聰、モカ、佐野好則、松田義幸、敬称略。

## ジャズに思う 源流と本質

グローバル化の中で、



ジャズの醍醐味は即興演奏とアドリブによるセッションにあります。どんな楽器でも、どんなリズムでも、どこかの国や地域の音楽でも、ジャズ化は可能なんです。ところが、今のジャズブレイヤーは、ジャズについて、固く難しく考えてしまいがちです。手法にとられ本質を見失っているような気がしています。

その本質とは、コミュニケーション、全体の流れの中で、何を、どのように感じ、表現していくか、です。自分があるフレーズを演奏すれば、周りがどう反応するのか、その反応(ほかの演奏者の演奏)を受けて、それなら、これでどうだ、という、メンバー同士の会話、対話、対談、座談会のようなものが、それが楽しいんです。エスカレートして、いわゆるフリージャズ化することもあります。ところが、そこからまた戻っていきんです。

コードの細分化、バンプ、モード、フリーを経験し、また源流へ回帰するというサイクルをスパイラルに循環しながら進化していきます。そのジャズが究極のスタイルというのではなく、永遠に回帰するものではない。

音楽やジャズの本質を知れば、

さらに楽しくなります。まず、極論ですが、人間が存在する前から、生き物の世界には、音と食(の「文化」といえるかどうか分かりませんが)がありました。

人類に限れば、原始的な打楽器や笛に始まり、それは、合図だったり、宗教的な祈願に用いられたり、と、言葉以前のコミュニケーション手段としての演奏の源流ですね。その源流である合図、会話、感情、祈願などがジャズの重要な本質的要素です。

音楽のグローバル化でいえば、音とともに歴史的な知識も一緒に伝えられることで、音だけ聞いても遠い国や地域では分からない感情的な要素も共有できるようにあります。グローバル化しているものには、心を打つところがあるんじゃないでしょうか。

ヴィリジアンでは、当初、クラシックとジャズ限定で音楽イベントを行っていましたが、初めてライブで聴かれる方も多かったので、聴いてみると楽しくなって、毎回のように来られるお客様もいらっしゃいます。

特に、ブレイヤーとオーディエンスが一緒になって楽しむような、音楽本来の理想的な、スタイルが出来つつあることも、今後楽しみ方の一つです。ジャズの歴史をたどりながら、トークと実演をリンクしたイベントなんか、面白くないでしょうか。

長島雅(ちがしまさ) 哲学文化塾代表取締役

# 「わが哲学を語る」を語り継ぐために

ちょうど五年前、日本を代表する哲学者、今道友信がこの世を去った。中学三年生用の国語の教科書にある人気エッセー「温かいスープ」の作者といえば、ご存知の方もいるだろうか。今道の偉大さは、業績に加え、人々を魅了し、哲学や美学へと誘う人間力にある。優秀な研究者が数多く今道派から誕生した。さらに、哲学や美学以外の研究者や財界を代表するリーダーにも影響を与え続けた。確かに哲学者だった。敵も多く、嫌う者もいたが、それは魅力的であることの裏返しであり、嫌われもせず、敵もいないような者は主役にはなれない。紋切り型の賞賛ではなく、哲学者今道の魅力を伝えたい。

(編集部HK)

美学（カロン・ロジャ）については、大石昌史氏のコラム（本誌19ページ）で紹介されているので、ここでは、哲学、創作、エコエティカについて、今道氏と縁のある方々よりご寄稿いただいた「コラム」を掲載する。「わが哲学を語る」を語り継ぐ」は、連載を前提とし、「フィロカルチャー」次号以降でも、語り継いで行きたい。

## 哲学と詩

いにしえより哲学と詩が対立関係にあると言われている。つまり「哲学と詩の闘争」である。かの偉大な哲学者プラトンは、若いころに詩を書いていたが、やがて師となるソクラテスから、詩をとるか哲

学をとるか二者択一を迫られた。もちろんプラトンが選んだのは哲学であった。

だが今道はこのような取捨選択をすることはなかった。生涯を通して哲学を愛し、詩を愛した。詩だけではない。和歌も詠み、小説も書いた。作曲も行い、ピアノも弾いた。絵も描いた。書も嗜んだ。茶の湯も好んだ。芸術全般を享受するだけではなく、創出もした。

今道がその多彩な芸術的才能を遺憾なく発揮したのは、特に詩歌の世界においてである。紙と鉛筆さえあれば、次々と言葉があふれ出て退屈するいとまもなかったようだ。このような表現が許されるとすれば、彼は「詩的哲学者」であると同時に「哲学的詩人」なのだ。「美しい言葉でなければ、よい考えは生まれぬ」と繰り返して語っていたが、まさに今道

## エコエティカとは

駅の階段で高齢者が重い荷物に難渋している。その苦しみを思いやり、手助けする優しさを内面に育むことの大切さを道徳は教えてきた。

しかし、リアフリー化する科学技術があり、そのほうが多くの人を助けるのだから、大切なのはそれを実現する手段ではないか。このような考えは伝統的な道徳の軽視につながるのか。科学技術の影響は倫理・道徳という人間の生き方の根幹にまで及んでいるのではないか。

今道はこのように問いかけ、「生圏倫理学」の構想を説明していた。現代の人間の生きる生活空間は深く科学技術の影響を受けている。今道はそのような生活空間を「生圏」という概念でとらえる。詳しくいえば、自然的環境と文化的環境に「技術連関」が加

わり「多層化した人類の行為行動圏」が「生圏」である。「技術連関」とは「科学技術の活動の及ぶ空間」を意味し、科学技術的環境である都市空間はもとより、ナノ空間、宇宙空間、サイバー空間などをも含む。この技術連関により成立した生圏では、従来の自然と文化の環境に生きる人間の指針となっていた道徳や倫理学だけでは人間の生き方を導くことが困難になっている。

今道は、この困難を克服する「新しい倫理学」の必要性を訴え、現代の「生圏に生きる人間の生き方」を考え直す生圏倫理学を提唱した。生圏倫理学は一九七〇年代初頭、哲学国際会議の場で「エコエティカ」のラテン語名で提言された。「生圏」のラテン語表記である「エコ」は「自然環境の配慮を意味する「エコ」とは直接関係しない。

エコエティカは哲学的倫理学である。今道は、「教養としてのヒューマニズム（古典研究を通して人間

の紡ぎ出す言葉は、論文でさえも美しくかった。室生犀星は見知らぬ美しい女性とすれ違うだけで、すぐさまその女性の人生を思い描き、物語を作り上げてしまつほど、想像力が豊かな文人であつたらしいが、今道もまた犀星に比肩する豊かな想像力にあふれていた。そしてその想像力は、詩人今道友信の周りにペンネームという形で多くの詩人仲間を生み出す。

優に百人は超える分身たち。名前がただ異なるだけではない。彼らは性格の異なる独立した詩人、歌人としてまさに存在し、それぞれの人生を歩んでいる。しかも彼らの生み出す作品は、今道の作品とも異なるものである。彼の分身は影ではなく、実存と言つても過言ではない。しかしながら、あえて分身の分身たるゆえんを見つけようとするならば、それは自然も含めた壮大な宇宙へのあこがれ、言い換えれば、今道の愛してやまない神へのあこがれの思いが作品の中に見え隠れすることであらう。

今道は「魂が純粹概念、イデアの世界に超越すれば、その果てに神との同一化が達成される」というプラトンの思想に共鳴し、「神との一致」にあこがれ、生涯思索を続けた。思索において、哲学的言語では言い表せないことを詩的言語を用いて言い表そうと試みることもあつた。そのため、彼の中で「哲学と詩が一つになっているようなところがある」と今道自身も述べている。哲学と詩は、今道の言葉を借りれば「闘争」ではなく、「和合」するのである。

三村利恵（ムネーモジューネーの会）

性を追究する人文主義」を哲学研究の基礎と考える。しかし、これまでの古典教養は局地的で限界のあるものと考え、「古典ヒューマニズム」を相互に補充する「普遍的ヒューマニズム」を追究していた。古典ヒューマニズムを背景とする従来の倫理学では、文化圏を越えボーダーレスに広がる科学技術連関の時代に即応できない。この状況を背景に、今道は、普遍的なヒューマニズムに基づく生圏のスケールで考える倫理学を構築していった。

若くより西洋の大学で哲学を教え、国際的学会で西洋哲学の碩学と親交を深めるうちに、今道は東西の哲学を超える「人類の哲学」を求めていく。東西の古典を駆使して哲学を研究した今道の思索のスケールとパースペクティブは「人類規模の倫理学」であるエコエティカのうちに表現されている。

伊藤博章（日美学園）

この手記は、今道氏のノートの冒頭に記されたもの。ノートは『ソクラテスの弁明』の原典注と解釈メモ。



© Christine Imamichi

今道友信（いまみち・とものぶ）  
東京大学名誉教授、清泉女子大学名誉博士、国際形而上学会会長、国際美学会終身委員・名誉会長、アジア・カトリック哲学者協会名誉会長、福島県しゃくなげ大使、日本アスペン研究所特別顧問、日本美容専門学校名誉校長。

## ■略歴

- 1922年 11月 19日 東京生まれ。
- 1940年：山形県旧制鶴岡中学から高知県旧制城東中学へ編入の後、卒業
- 1945年：第一高等学校文化甲類卒業
- 1948年：東京大学文学部哲学科卒業
- 1955-1958年：パリ大学（研究員）、  
ヴェルツブルク大学非常勤講師。
- 1958年：九州大学助教授
- 1963年：東京大学助教授
- 1964年：ヴェルツブルク大学客員教授
- 1966年：シエルティ工賞受賞
- 1968-82年：東京大学文学部教授
- 1968-90年：国際美学会副会長
- 1974-2010年：哲学美学比較研究国際センター所長
- 1986年：紫綬褒章受賞
- 1983-85年：放送大学教授
- 1986-97年：清泉女子大学教授、副学長
- 1993年：勲三等旭日中綬章受賞
- 1998年：FISP（国際哲学学会連合）運営委員
- 1996-99年：哲学国際研究所所長（会長）
- 1999-2012年：日本美容専門学校美学芸術学学科長  
（2006年より第4代校長兼任、2012年より名誉校長）
- 2003年：第25回マルコ・ポーロ賞受賞（『ダンテ『神曲』講義』）
- 2006年：第19回和辻哲郎文化賞受賞（『美の存立と生成』）
- 2012年 10月 13日：永眠

# プレゼント&インフォメーション

本誌アンケートに、ご協力ください！

アンケートにご協力いただいた方で、ご希望の方には、抽選で、プレゼント（本誌記事関連書籍①②③各1名様）いたします。アンケートは、インターネットでのみのエントリーです。

>> プレゼント応募締め切り  
2018年1月31日（水）

>> 詳細はホームページで  
12月中旬掲載予定  
<http://philoculture.jp/>



①『世界遺産への道標』  
松田義幸・編



②『美の存立と生成』  
今道友信・著



③『迷うさこの感じる哲学漫画』モカ・著

●プレゼント当選者の発表は、2018年3月上旬頃、哲学文化塾ホームページ（またはTwitter）に掲載いたします（ハンドル名（掲載可能なもの）：例）〇〇県〇〇市〇〇様。また、当選された方には、e-mailにてお知らせいたします。当選後、あて先をお知らせください。個人情報の取り扱いについて：プレゼント発送に使用し、哲学文化塾が個人情報保護のため責任を持って管理いたします。

●後記 ● 世界遺産とヒューマニティーズ（人文学）という括りで構成した。世界遺産は文化や人間の営みを考えるうえで、有益なりソースの一つだ。地域の見惑・修惑も絡み、それはそれで人間的である。また、個々の記事で扱っているテーマは、古典だったり、ラテン語だったり、美しさだったり、人工知能だったり、とバラバラだが、最終的には人間を（人間的に）考えることに収束する。

そして文学を介して人間を考えることに、「より特化した学」が人文学である。「より人間的な学問」と換言できる。人文学はラテン語で「Literae Humaniores」というそうだ。なぜ比較級なのかを中務哲郎さんにお尋ねしたところ、神学や自然科学よりも人間的なこと（文学）を扱うからではないかという大変説得力のある、よろこばしいご意見を頂戴した（本誌目次ページのコラム参照）。

本誌も一つの柱は、ご覧のとおり、「今道友信メモリアル」である。機関誌発行と並行し、偶然が重なり、今年から「今道友信・メモリアル・シンポジウム」を日本美容専門学校で開催できることになった。「お芝居レトロ鍋」という演劇ユニットによる朗読劇、シエイクスピア『ペリクリーズ』。今道美学とどのような関連があるのか、ないのか、よく分からなかったが、レトロ鍋代表の夏目祐里さんから、演劇美について、作り手と観客が存在して、初めて美の照応が成立するという今道美学をご指摘いただいた。おまけに朗読劇享受には想像力が必須とのことと、「美の存立と生成」の第二章を思い出させてもらった。

さらにシンポジウムでは、今道さんが勤められていたことのある清泉女子大学の前学長で、シエイクスピア研究者、門野泉さんにトーク・ナビゲーターとしてご出演いただくことになった。ありがたい。

そんな訳で、秋以降、哲学文化塾の流れは淀みなき方角へ向かい始めた（？）のような気もしないではないが、いずれにせよ、何らかの需要があるものは残る。結果、どうなるかは、分からないが、判断ミスなどで自滅しないよう、注意して進めたい。

そして哲学文化塾が存続するためには、何といても、さまざまな方々のさまざまな協力、協働が不可欠である。それなくして、次号はない！のも確かだ。もし、このような哲学文化塾の活動にご関心のある方がいらっしゃれば、お力添え、いや、何らかのコラボができれば、とてもうれしい（hamacken）。

哲学文化塾の活動をご支援ください！

1. 「フィロカルチャー」支援購読  
ご支援額 1500 円で次号をお届けします。
2. 「フィロカルチャー」& 哲学文化塾支援  
ご支援額 10000 円で「フィロカルチャー」次号と和辻哲郎文化賞受賞作、『美の存立と生成』（今道友信・著）をお届けします。  
お問い合わせは、下記までお願いいたします。  
e-mail: [info@philoculture.jp](mailto:info@philoculture.jp)  
fax: 020-4662-3528

もっと源流へ、もっと本質へ！  
哲学文化塾 ~フィロカルチャー~  
utibiles sophiamque cano non arma uirumque

哲学文化塾について

Eメール：[info@philoculture.jp](mailto:info@philoculture.jp)  
ホームページ：<http://philoculture.jp/>  
Twitter：<https://twitter.com/philocultures>

フィロカルチャー (La Philoculture) 2017年秋冬号  
Publisher Yoshiyuki MATSUDA  
Editor hamacken  
Artdirector Mikiko KURODA

語り継ぎたい今道哲学

今道友信先生には、二〇〇五年より二〇〇九年まで自坊高德院において、一四回にわたり哲学を講じていただきました。人一倍ご多忙な先生が遠路をいとわず、繰り返し当山にお越しくださいましたのは、ひとえにご本尊たる大仏像とご自身のえにしを大切に思われておられたがゆえでありましょう。ご幼少時ご家族と一人離れて暮らす寂しさを癒されるべく、幾度となくご尊像と向き合われたこと。また、哲学者として大成された後も、数多の海外研究者と当山を訪ねられ、わけてもご子息を亡くされ失意のうちに来日されたポール・リクール博士とは共にご尊像を仰がれる仲、生涯忘れ難いときを過ごされたこと。先生からは、幾度かそうした思いも何わせていただきました。

都合一四回ですから、大学でいえば、ちょうど半期分に相当する回数、講義を受講させていただいたことになりました。大学教員も務めておられます関係で、幸いにも、私はこれまで高名な研究者のご講義、ご講演を拝聴する機会に数多く恵まれ、知的興奮も人一倍味わってきたと自負しております。しかしながら、拝聴後、魂を揺さぶられるような感銘を受けたご講義は、先生のそれをおいてほかにありません。

孔子、荘子の教えをひも解くことから始まったご講義は、ソクラテスに端を発する哲学が元来「魂の世話」に当たり、その実践が肉体の世話と同様私た



大異山高徳院清浄泉寺の本尊、阿彌陀如来坐像。  
鎌倉大仏、長谷の大仏として知られる。

ちにとつて等しく不可欠な営みである点の確認へと展開。その後「自然」や「法」「詩」についての言及を経て、「生園倫理」の解説へと至りました。

他者の幸せを願ひ、自身の大切なものを差し出すことが「善」。他者によって差し出された大切なものを自身が背負う、言い換えれば社会的責任を負うことが「義」。他者のために大きな犠牲を払うことが「美」。論語をひも解き、漢字の字義にまで立ち返ってそれらをご説明たまわる中、私はいかなる基準に照らし自身の行動を決すべきかを改めて教えていただいた気がいたしました。

また、「生園倫理」について解説されたご講義では、科学技術が発達した現代社会で求められる徳目もお示しいただきました。私たち銘々が身の回りの小さな「美化」に努めなければならぬこと。自身の存在に感謝し、他者の幸せを祈る、奉仕の精神を持つ人物が世界を変革しうる。それらも説かれて締めくくられたご講義から、人生の指針を得た受講者はひとり私ばかりではないでしょう。



日本美容専門学校での講義、エッセーをベースに編集された今道美学・芸術学の入門書の決定版。日本図書館協会選定図書。『新訂 美について考えるために』（ピナクス出版、2015年）



本コラムでも触れられている、今道哲学の入門書の決定版。佐藤孝雄、池田雅之両氏による編集。『今道友信が哲学を語る今、私達は何をなすべきか』（かまくら春秋社、2010年）

幸いにして、高德院でのご講義の内容は、池田雅之先生とともに『今道友信 わが哲学を語る』と題する書籍にまとめさせていただくことができ、版も重ねております。

もっとも、親しくその英知に浴する幸運を得た私たちは、これに満足することなく、今後とも折あるごと先生の教えを後世に伝えてゆかねばなりません。特に過激な思想が台頭し、混乱も極める現代世界にあって、次代を担う若い世代にこそ、「魂の世話」が必要と考えます。

末文ながら、今道友信記念文庫が多くの若者が今道哲学を学ぶ契機ともなることを願ひ、筆をおくことにいたします。

佐藤孝雄（鎌倉大仏殿高德院）

La Philoculture



[philoculture.jp](http://philoculture.jp)



もっと源流へ、もっと本質へ！  
哲学文化塾

フィロカルチャー 秋冬号 二〇一七年十一月二〇日発行 発行所 哲学文化塾 〒113-5106 東京都江東区有明3-7-12 有明マロニエプレイスB棟5階 申込先 哲学文化塾 e-mail: info@philoculture.jp 印刷 ランセル株式会社